

「源平の戦い」をわかりやすく解説 (期末テスト対策ポイント)

平清盛が武士で初めての太政大臣になって、武士が政治の中心になる時代が
はじまったよね。その後、平氏がどういう政治をして、なぜ源氏に負けるこ
とになってしまったのかを解説していくよ。

平清盛はどんな政治をしたの？

「藤原氏のやり方と変わらなくない？」

「保元の乱」や「平治の乱」で活躍した平氏はすっかり朝廷にとっても
「頼りになるヤツ」になったわけだよね。

そしてとうとう「平清盛」は朝廷の政治のトップでもある「太政大臣」にま
でなってしまった。

こうなると、平清盛の言うことなら、天皇も「OK」と言うしかない雰囲気
。そこで平清盛は、平氏の人間をどんどん政治の「重要な役」にしてもら
ったよ。



そして自分の娘を次々に天皇のお嫁さんにしていったんだ。
お嫁にいった娘のところに皇子が生まれれば、その皇子が次は天皇になっ
て、自分は「天皇のおじいさん」としてさらに力を持てるからね。
そして、「荘園」もたくさん持つようになって、どんどんお金持ちになって
いったよ。

このやり方って、なんとなく覚えがないかな??

そう。藤原道長と同じだよ。

平清盛は武士で初めて政治の中心にはなったけど、この頃のことは
「武家政権（ぶけせいけん・武士による政治）」としてはカウントしない
よ。

だって、藤原氏の摂関政治とあまり変わりがないからね。

※「宋（そう）」という中国の国と貿易をしてお金を稼（かせ）いだことは、平氏オリジ
ナルのやり方だとは言われているよ。

「平氏、いい加減にしろ！」

こうやってどんどん権力と土地やお金を手にしていった平氏。
とうとう、「全国の半分近く」の土地を平氏が独り占めする状態に。

政治の偉い役職も平氏ばかりにさせるし、
「自分たちさえ良ければいい」というふうには他の人は感じたんだね。

「平氏、ちょっとズルくない??」
とだんだん反感を買うようになったんだ。
さらにここで口を滑（すべ）らした人が登場。
平清盛の義理の弟の「平時忠（ときただ）」が、
「平氏にあらざるば人にあらず」
なんて発言してしまったらしいんだ。



「平氏じゃない人間なんて、『人』じゃない」という意味なんだ。
 「自分たち以外はヒトではない」と言ってしまったんだね。

ただでさえ反感買ってるのに、それはマズいよね。
 まさに今でいう「炎上」モノだよな。



このことは、「平家物語」に書かれているよ。

「平家物語」は、平氏が栄（さか）えて、そして落ちぶれてしまうまでのことが書かれているよ。

「祇園精舎（ぎおんしょうじゃ）の鐘の声 諸行無常（しよぎょうむじょう）の響（ひび）きあり」は有名だよな。

作者は不明なんだけど、「徒然草（つれづれぐさ）」という本には「平家物語を書いたのは信濃前司行長（しなののぜんじゆきなが）だ」と書いてあるよ。

平家物語には、平時忠が「此（この）一門（いちもん）にあらざらむ者は皆（みな）人非人なるべし」と言ったと載っているんだ。



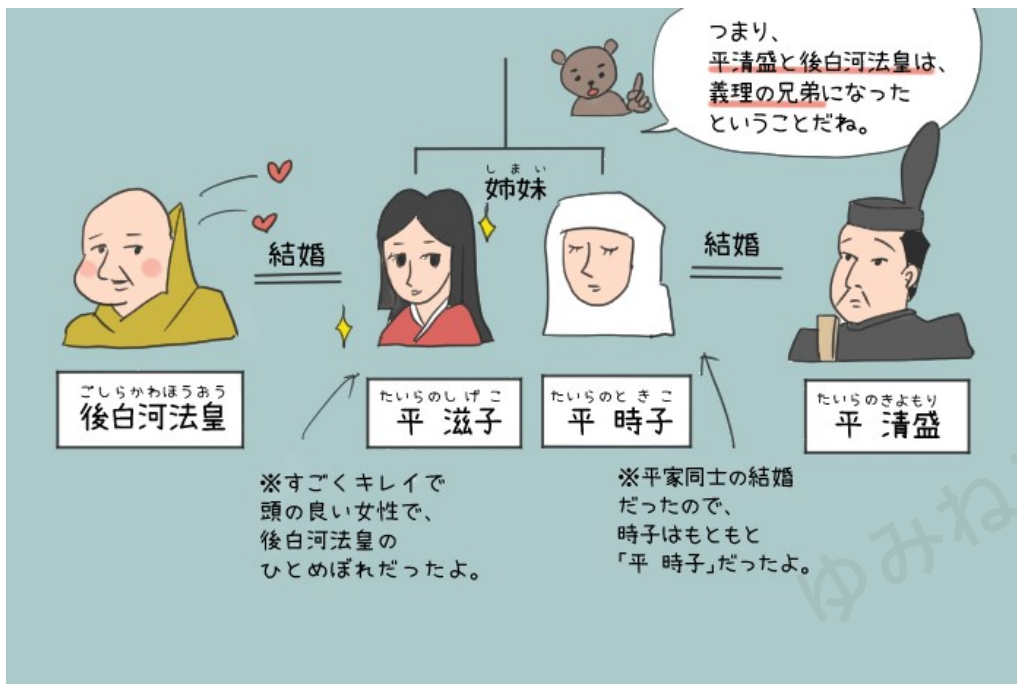
法皇（ほうおう） & 皇子「だまっていられない！」

後白河法皇（ごしらかわほうおう）が「だまっていられない」

あまりに平氏ばかりが栄えてしまうことに
「このままじゃまずい」
と思ったのが後白河法皇。

後白河法皇は、保元の乱で武士に協力してもらって勝った天皇だったよね。

なので、後白河法皇は、保元の乱で活躍した平氏を認めてきたほうだった。
法皇のお后（きさき）さまは、平清盛の奥さんの妹（つまり義理の妹）だったし、平清盛にとっては味方のようなものだったんだ。



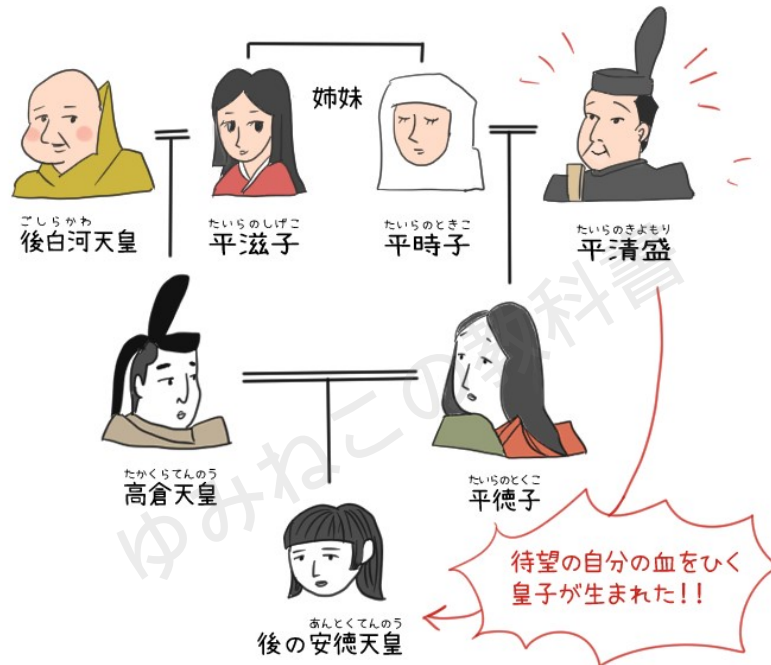
でもその後白河法皇が平氏の力をおさえようとして、清盛にだまって平氏の荘園や領地を没収してしまったんだ。

これには平清盛も「ヒドイ！」と怒って、なんと後白河法皇を閉じ込めてしまう。



後白河法皇と清盛の義理の妹との間に生まれた皇子は天皇に即位していたし
 ※高倉天皇（たかくらてんのう）というよ。

さらに高倉天皇と清盛自身の娘を結婚させて、皇子も誕生していたからね。



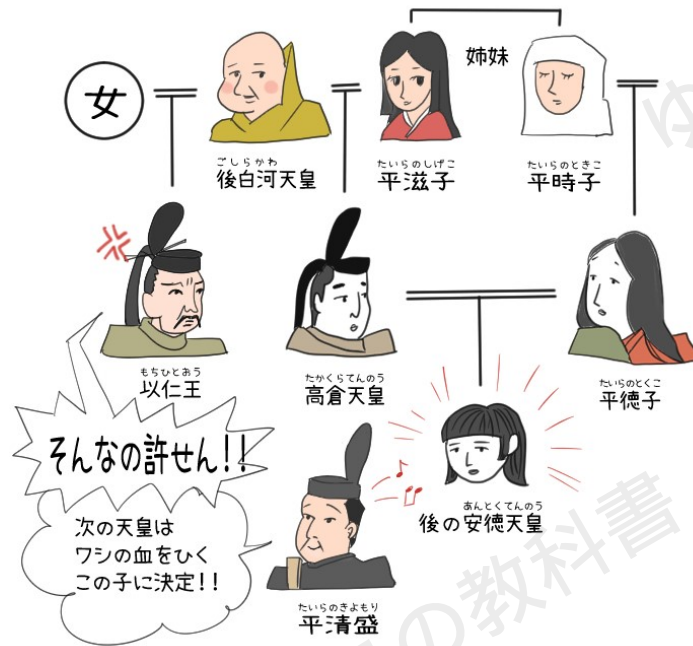
それだけ清盛の力があったんだね。

でも「法皇を閉じ込めた」ことでさらに清盛の「やりすぎ」に人々は不満を持ったよ。

以仁王（もちひとおう）が「だまっていられない！」

清盛は高倉天皇と自分の娘の間に生まれた皇子を、なんと数え年3歳（1歳4か月）の時にさっさと「天皇」に即位させてしまったんだ。





流石に「まだ赤ちゃんじゃん!」となるよね。

自分の血をひく皇子が天皇になることで、政治での力は絶対なものになるからね。早く&確実に天皇にさせてしまいたかったんだね。

後白河法皇には、他にも「以仁王」という皇子がいたよ。

清盛とは血縁関係のない皇子だね。

以仁王は、清盛の血筋の皇子が天皇になってしまったら「もう自分が天皇になれる可能性はない」と絶望したんだ。

「そんなことが許されるものか!」と以仁王は、「打倒清盛」を決意。

そして全国にバラバラになっていた源氏におけて、「平氏を倒せ!」という命令文を出したんだ。

結局、以仁王は清盛の軍に負けて殺されてしまったよ。でも、この命令文が源氏達を動かすんだ。



源氏が立ち上がる

「平治の乱」で平氏に負けてしまった源氏は、全国にちりぢりにさせられてしまっていたよね。

そこに以仁王からの「源氏よ！平氏を倒せ！」の命令文が届いたんだ。

そして、とうとうあの有名な
「源頼朝」が立ち上がるんだ。

平氏は「自分たちさえよければいい」政治をしていたからね。

地方の武士は土地も思うように持つことができず、とても苦しい目にあっていたんだ。

だから以仁王の命令文にたくさんの武士が立ち上がったし、源頼朝に期待して味方をする武士団がたくさん集まったよ。

源頼朝ってどんな人？

源頼朝は、平治の乱で中心になった「源義朝（みなもとのよしとも）」の息子。平治の乱でも、一緒に戦っていたんだ。

その時はまだ13歳だったし、初めての戦いだったよ。

平治の乱で、源氏が負けそうになって、義朝と一緒に雪国を逃げたんだけど、途中ではぐれてしまって平氏につかまってしまったんだ。

※お父さんの義朝も平氏につかまって殺されてしまったよ。

清盛は、「源氏の子供なんか殺してしまえ！」

と処刑しようとしたんだけど、清盛の義理のお母さんが頼朝をかばってくれて、命は助けられたんだ。

頼朝は、「平氏に逆らった罰」として、伊豆に流されてしまう。

でも、さすがの「源氏の正しい血を引く」頼朝は、人々から一目おかれた（スゴイと思って、遠慮すること）んだ。

頼朝は思ったより自由な生活をしていたらしいよ。



伊豆（関東）にはもともと源氏を支持する武士も多いしね。
なぜなら、朝廷が東北地方を支配するために送っていたのが源氏だったよ
ね。関東の武士にとって、源氏の強さは有名だったんだ。

「平氏に逆らった罰」として伊豆に流された頼朝には、監視（かんし）役も
つけられたよ。

それが「北条時政（ほうじょうときまさ）」。

でも、北条時政の娘の「北条政子（ほうじょうまさこ）」と頼朝は結婚する
んだ。

もともとは監視役だった北条時政も、「娘の婿（むこ）」の頼朝には協力す
るようになっていくよ。

頼朝も打倒平氏を決意！

以仁王の「諸国の源氏よ、平氏を討て」という命令文は、頼朝の心も動かし
たんだ。

そして、とうとう「打倒平氏！」と兵を挙げたよ。（兵士を集めて、戦う準
備をすること）

頼朝のところには、バラバラになっていた源氏の武士団がどんどん集まって
きたし、関東で人気だった頼朝には、他の武士団も「一緒に戦います！」と
協力してくれたんだ。

特に、頼朝の弟の「源義経（みなもとのよしつね）」も駆けつけてきてくれ
た。

義経は、とても戦いに強いことで有名なんだ。

頼朝は、打倒平氏の準備をするのに、鎌倉を拠点（きょてん・活動するため
に足場となる重要な場所）にしたよ。

どうして鎌倉を選んだのかというと、鎌倉は、源氏にとって大切な場所なん
だ。

というのは、頼朝の5代前の「源頼義（みなもとのよりよし）」が京都の石
清水（いわしみず）八幡宮（はちまんぐう）にお参りした時、



「霊剣（れいけん・スゴイ威力のある剣）」をもらう夢をみたんだ。
ゲームで勇者がもらうような「伝説の剣」みたいだね。

八幡宮とは、八幡（はちまん・やはた）さまをまつる神社で、八幡さまは
「戦いの神様」なんだ。※応神天皇（おうじんてんのう）が八幡さまになったと言われているよ。

それから源氏は八幡さまを
「氏神（うじがみ・一族を守ってくれる神様のこと）」としてまつることにしたんだ。
そして八幡さまの御霊（みたま・神様のたましいのこと）を分けて、源氏の所有地だった鎌倉にお迎えしたんだ。
それが鎌倉市にある「鶴岡（つるがおか）八幡宮（はちまんぐう）」なんだよ。

武士にとって、祖先（そせん）から縁（ゆかり）のある土地は、「家」や
「血筋」と同じくらい大切なものなんだ。
だから頼朝は鎌倉に拠点を置いて戦ったんだね。

源平の戦い

こうしていよいよ平氏と源氏が戦うことになったよ。
平治の乱では源氏を負かした平氏だったけど、朝廷で政治を動かす生活ばかりしていたから、すっかり「戦う力」が弱くなってしまっていたんだ。
さらに、そんな苦しい中、1181年に平清盛が重病にかかって亡くなってしまったんだ。

「平家物語」によると、清盛は亡くなる直前、「私の墓には頼朝の首をそなえてくれ!」と言い残したとあるよ。よっぽど悔しかったんだね。
中心的存在だった平清盛が亡くなってしまって、さらに平氏のパワーはダウン。とうとう、壇之浦（だんのうら）の戦いで平氏は源氏に完全に負けてしまったんだ。



壇ノ浦の戦いでは、頼朝の弟の源義経が大活躍したんだよね。

この壇之浦の戦いで、「もう源氏に勝てない」と負けを覚悟した平清盛の奥さんの平時子は、まだ数え年8歳（6歳4か月）だった安徳天皇（あんとくてんのう）を抱きかかえて海の中に飛び込んだよ。

「源氏の手にかかって殺されるくらいなら」、と、自分から身投げしたんだね。

安徳天皇が「私をどこに連れていくのか？」と聞くと、時子は「波の下にも都はあります」と言って飛び込んだのは有名な話。（これも平家物語に書いてあるよ。）

たったの6歳で…悲しいね。

本格的な「武家政権（ぶけせいけん）」の始まり

平氏と戦う中、頼朝は鎌倉を拠点にしたよね。

頼朝は、このとき鎌倉に「政府（せいふ）」を作ったんだ。

つまり、京都にある朝廷とは別の、「武家（ぶけ）」による「新しい政府」が生まれたんだよ。

これが日本の歴史で初めての、本格的な

「武家政権」の始まりなんだ。



この時代の流れをざっくり言うと？

平清盛が太政大臣になる

↓

平氏ばかり偉くなる・土地をたくさん持つ・お金持ちになる

↓

他の武士の反感を買う

↓

やりすぎの平氏をおさえようと、後白河法皇が土地を没収

↓

清盛が後白河法皇を閉じ込め・自分の孫を天皇にする

↓

以仁王が平氏を倒そうとする・源氏に「平氏を倒せ」と命令文

↓

源氏が壇ノ浦の戦いで平氏を滅ぼす

年表をチェック！

- ・1167年 平清盛が太政大臣になる
- ・1180年 源氏が平氏を倒すために兵を挙げる
- ・1185年 壇ノ浦の戦いで源氏が平氏を滅ぼす



6年生はココを押さえればOK！

まとめ

源平の戦い まとめ

※赤いキーワードは絶対覚えよう！

- 平氏は、藤原氏の摂関政治のような政治をおこなった。
- 平氏中心の政治は武士の反感を買った。
- **源頼朝**が平氏を倒すために兵を挙げた。
- 戦いでは、源頼朝の弟である**源義経**が活躍した。
- **壇之浦の戦い**で源氏が平氏を滅ぼした。

